様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１３２５

研究課題名（和文）東南アジア大陸部におけるイスラーム受容と社会関係の歴史像構築のための基盤研究

研究課題名（英文）Historical Study on the Reception of Muslim Minorities in Mainland Southeast Asia

研究代表者
池田　一人（Ikeda, Kazuto）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・准教授

研究者番号：４０７０８２０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,000,000円

研究成果の概要（和文）：合計13回の研究会、2回の合同海外調査、最終年度の国際シンポジウムをとおして研究目標を達成することができた。合同調査ではバンコクのムスリム・マイノリティ、カンボジアの多様なムスリム・コミュニティの調査を行いデータを採取できた。またクーデターによって調査を断念せざるを得なかったミャンマーについては、ラカイン地方の関係古文書史料の相当数の電子化を行うことができた。とくに研究成果のあがった東南アジア大陸部西部のベンガル事例と東部のチャム事例について、国際シンポで計7つの発表報告を行った。さらに近世以来の時間軸のなかでイスラームと民族形成についての新しい研究課題の地平も開拓することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、とくに大陸部西部のベンガル系と東部のチャム系のムスリム・マイノリティの2事例ついて、近世から現代までの東南アジア大陸部におけるイスラーム受容の変遷と現地社会との関係の歴史的全体像を明らかにし、その史的視野によって当地におけるイスラームの現代的位置付けを再評価することができた。史料調査を旨とする歴史学と口承史資料や社会調査に強みがある人類学とが調査段階から協働し、互いの知見を交換しつつ２事例について大局観の構築を試みた。とくにベンガル事例（ロヒンギャ）については、宗教間の軋轢を原因とする現代的諸課題と共存のあり方について、一定の歴史的視座を提供することができたと評価できる。

研究成果の概要（英文）：Through a total of 13 research meetings, two joint overseas surveys, and an international symposium in the final year of the project, we were able to achieve our research goals. During the joint survey, we were able to collect data on Muslim minorities in Bangkok and various Muslim communities in Cambodia. In Myanmar, where research had to be suspended due to the coup, we were able to digitize a significant number of old documents related to the Rakhine region. In particular, we made seven presentations at international symposia on the Bengal and Cham cases. In addition, we were able to develop a new research agenda on Islam and ethnicity in the context of the time span since the early modern period.

研究分野：東南アジア史

キーワード：東南アジア大陸部　イスラーム　上座部仏教　ロヒンギャ　チャム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 東南アジア大陸部におけるイスラームの多様性は、三方をイスラーム世界に囲繞されてきた地理的歴史的事情による。つまり、西方は中央アジアと中東に連なるインド亜大陸、南方は世界最大のイスラーム人口を擁する東南アジア島嶼部、北方では古来多様なイスラーム・マイノリティが分布する中華世界という、3 つのイスラーム世界に接する。域内では、西のエーヤワディ流域から東のメコン流域にかけて 15 世紀頃までに優勢となる上座部仏教国家領域で、西部に 15 世紀ころからベンガル系、南部に 14 世紀以降のマレー系、北部に 19 世紀以降に中国系の大きなイスラーム集団が定着している。東端ではベトナム諸政体の勃興をよそに、2 世紀以来のチャムが海洋交易をとおして 17 世紀頃までにイスラーム化している。これら縁辺部のみならず内陸部でも、諸王権下の通商や軍事の需要に応える商人や廷臣、軍隊などでアラブ、ペルシア、インド、ベンガル、マレー、中国世界からムスリムが来住しコミュニティが定着している。

(2) 当地における多様かつ複雑なイスラームの歴史に対して、大局的な歴史状況を明らかにする研究は進んでいない。第一に、個別の優れた研究はたいてい一国史の内側にとどまる。第二に、現代東南アジアのイスラームをめぐる諸問題は、主として近代以降の国民国家の論理を暗黙の前提として立論され主題化される。マスコミでは 911 とテロリズムがイスラームに安易に結びつけられ、史的検討があっても近代以降の原理主義運動の文脈で理解される。上座部仏教圏のタイ深南部やミャンマー西部の事例に対する扱いは典型で、対立・紛争がたやすく一般化・歴史化され「仏教とイスラームは水と油のごとく」なる本質主義的言説が容易に力を得る。そこでは、前近代以来の広範な受容の史実が、近現代のナショナリズムの世界観と歴史観によって上書きされ忘却される。第三に、大局観の試みはあっても、宗教・民族区別に無頓着な前近代諸王権の植民地化ののち、植民地行政下でこれらの人的区分が実体化して対立が顕在化、国民国家下に至って各地で宗教・民族紛争が噴出すると理解される。ともすれば共存から対立・紛争へという単線史観で雑駁な歴史理解である。

２．研究の目的

主要な研究目的は以下の３点であった。

(1) 第一は、大陸部イスラームの歴史的見取り図について。西方ベンガル系と南方マレー系ではイスラーム・上座部仏教世界が直に接する長い相互浸透過程、東方のチャムはいわば自己イスラーム化、北方の中国系は 19 世紀雲南地方での政治騒乱による亡命という各背景、他方で内陸や王都のアラブやペルシア、インド系の中小事例には前近代王権との交易や軍事的交渉の歴史がある。多様な事情とパターンが感知され、そこに「共存」「対立」など現代状況を念頭にした定規をただちにあてることなく、経済・政治・社会的な諸要因を指標化して一貫した尺度で史的変遷を再構成するべきであろう。

(2) 第二は、相互認知とカテゴリーの歴史的・社会的成立過程について。第一の歴史的問いは名称と概念に関する認識論的問いを惹起する。大陸部の歴史の各所に出現し定着した彼我のムスリムがつねに「イスラーム」という同一カテゴリーとして認知されてきたわけではないし、大陸部の過半を占める受容側に「上座部仏教」なる標準化した名乗りがあったわけではない。ベンガル、マレー、北部山地、チャムなどの大陸縁辺・境域で両者の認知と観念がいかに析出されてきたのか、宗教論理や他者認識のパラダイムシフトがいかに起こり、宗教的認識枠が近代に優勢になるナショナルな意識といかに関係を切り結んで現代に至るのか、出版や SNS メディアの影響はどのようであるか、認知と範疇の形成・変遷史研究が必要である。

(3) 第三は、現代イスラームの社会的位置付けの再評価について。見えにくい内陸の諸コミュニティが共生状態を維持するのに対して西部と南部縁辺で対立・紛争状況に至っているが、これはどのレベルでいかなる要素・関係性の変化に起因しているのか。共存と対立に関する有意な問題設定は、以上 2 点の検討を経て前近代からの長期的位相下で再設定できる。

３．研究の方法

研究の方法と課題、体制は以下のようであった。

(1) 方法：人類学者と歴史学者が協働し、インタビューと参与観察等の現地調査、文献調査を基本とした。

(2) 課題：３つの課題を設定した。
課題① 大陸部のムスリムに関する基本的情報・知見の収集と整備：　ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム各国におけるムスリムに関する基本統計（人口・宗派・エスニシティ・

職業・居住等)、法制、宗教・教育・商業活動、組織化とネットワーク、周辺コミュニティとの関係など基本情報や先行諸研究を収集整備する。2019 年度から 2 年間助成される京都大学 IPCR 予算（後述）により、すでに作業に着手している。

課題② 比較のための指標策定とデータ集成：　諸事例を共通の座標上で比較できるようにするため、指標を設定し従来研究の再検討と現地調査を通してデータを集成する。指標としては、(a)言語・文化要素、来住定着／イスラーム化経緯と隣接コミュニティ関係、　(b)統治者との関係（王権・地方権力・植民地政庁・国民国家 etc.)、住民把握と賦役・課税、(c)商業と経済環境、(d)宗教・民族範疇と自他認識、(e)政治・宗教運動、国際環境とメディアなどであり、とくに地域偏差と歴史変遷に留意する。現地調査では、当該地専門のメンバーを中心とする合同海外調査と個別調査を組み合わせ、互いの経験と知見を調査段階から共有しつつ指標の精度を高める。

課題③ 歴史的全体像の提示：　東南アジア大陸部のイスラームに関係する諸種の機制・論理・因果関係、史的見取り図、現代紛争事例の史的位置づけについて総合的理解を構築する。第一に、(a)広域政治権力（マンダレー・ヤンゴン・バンコク・サイゴン・ハノイなどの王権・植民地政庁・国民国家)、(b)中規模政体（ラカイン・シャン・チェンマイ・プノンペン・ビエンチャンなど)、(c)地方の村落など、各階層・各地域での、統治慣行や政治、経済社会的交換、メディア作用などについて、そのメカニズムや論理とイスラームの関わりを叙述し、自他認識とカテゴリーの生成過程の具体事例を特定して類型化・定式化する。第二に、西方と南方イスラーム世界境域での政治経済情勢、東方チャムでは南シナ海交易、北方雲南地方での政治状況、植民地化と世界経済への編入、民族運動と独立、冷戦と新宗教運動の勃興、グローバル化とその反動など、大きな社会変動に第一の諸点を配置して位置づけ史的全体像を描出する。第三に、以上のいずれの要素の変容により現代の対立と紛争が生じているのかという歴史的説明を提示する。

(3) 研究体制：周縁４事例・内陸部諸事例・移動事例で計 10 班を構成し、各メンバーは主副で複数を担当した。研究協力者として大川玲子（明治学院大学教授）と石川和雅（上智大学博士課程満期退学)、ミャンマーから Zaw Lynn Aung（ヤンゴン大学歴史学部准教授)、タイから Srawut Aree（チュラロンコーン大学アジア研究所研究員）を迎えた。

４．研究成果

研究成果として、研究会の開催、史料の収集と電子化、合同海外調査、そして国際シンポジウムの開催を挙げることができよう。

(1) 研究会の開催：

1 年目には 4 回の研究会を実施した。第１回（6/13）はキックオフ会として本科研の方向性を決定した。第 2 回（8/25）はミャンマーのラカイン事例を研究代表者の池田が「ラカイン地方の 500 年史：歴史の概略・研究史・史資料について」、マレーシアの事例を黒田景子氏が「シェイク・ダウド・アル・ファタニとパタニ・ウラマーネットワーク」と各々題して報告した。第 3 回（11/23）ではベトナムのチャム事例を吉本康子氏が「チャム社会における宗教覚醒：「アガマ・チャム」とイスラーム」、王柳蘭氏が「中国系ムスリムの越境物語にどう向き合うか」を報告した。第 4 回（3/23）では Zaw Lynn Aung 氏（元ヤンゴン大学歴史学部教授）に The Muslims Appeared in Rakhine Historical Sources との題目で報告いただいた。

2 年目には 3 回の研究会を開催した。第１回（7/31）ではカンボジアのチャム事例を研究協力者の大川玲子氏（明治学院大学)、カンボジアのムスリム事例をメンバーの小林知氏に、第２回（11/23）に、やはりカンボジアの近世クメール宮廷の事例をゲストの遠藤正之氏、ベトナム・チャムの事例を新江利彦氏に、第 3 回（3/23）に近世ラカインの事例を協力者のゾーリンアウン氏に報告してもらった。

3 年目に研究会は３回実施した。第１回（6/25）にメンバーの村上忠良氏に「バンコクにおけるムスリム・マイノリティとモスクの形成―ジャワ系・チャム系・パキスタン系」と題して、バンコクのムスリム・コミュニティの概要をお話しいただいた。第２回（2/4）では研究協力者の石川和雅氏（独立研究者）に「ベンガルとミャンマーを結ぶ陸路と海路」というタイトルで、ミャンマー世界とその西に広がるイスラーム世界の歴史的つながりについて発表いただいた。第 3 回（3/25）にはサマック・コセム氏（チェンマイ大学の博士候補生）に A Counterpoint to Contemporary Thai Muslim Identities in Spatial Patterns and Movements という題目のもと、ひろくタイ社会のムスリムの状況をお話しいただいた。

最終の 4 年目に研究会は 3 回開催した。第１回（5/25）では岩城考信氏（呉興行高等専門学校）より「イスラームのモスク・集落・墓地から見る多民族都市バンコク」、第 2 回（6/11）は中村理恵氏（東洋大学アジア文化研究所客員研究員）より「ベトナム・メコンデルタのムスリムチャム」というタイトルで発表をいただいた。7 月から 11 月のあいだには、国際シンポジウム開催のために、発表テーマの西部ロヒンギャ班と東部チャム班に分かれておのおの数回のオンライン研究会を開催した。本科研最終の研究会（2/21）では、バンコクとカンボジアという 2 度の合同海外調査の総合的な検討会を行った。

(2) ミャンマー・ラカイン関係古文書の電子化：

令和３年度の最大の目標であったミャンマーへの合同調査が、コロナ禍と 2021 年 2 月のミャンマー軍事クーデターにより実施不可能となった。そこでフィールド調査に代替することはできないとしても、かわりに歴史資料の調査・研究に注力を行った。とくに現地研究協力者であるゾーリンアウン氏の協力を得て、ラカイン地方の重要な前近代史料である 19 世紀の王統史文書３点を入手し電子化を行うことができた。また、1974 年に鹿児島大学調査団によって収集されて鹿児島大学等に保管されているビルマ前近代文書のマイクロフィルム 115 巻には、ラカイン前近代文書が多く含まれていることがわかっているが、これを一括して電子画像資料化することができた。

(3) 合同海外調査の実施：

令和４年度にタイ・バンコクで、令和５年度にカンボジアで合同海外調査を実施した。

令和４年度にコロナのために延期していた初年度のタイ合同調査を、2 年延長したのちに実施することができた。8 月下旬の 10 日間ほど、池田ほか村上、菅原、山根の 4 人でバンコクのムスリム・コミュニティ 10 数か所を調査してインタビューを行った。王朝時代以降、諸種の背景事情のもとマレー系、チャム系、パキスタン系、インド系、バングラデシュ系など多様なムスリムが定住していて、タイ社会に親和的に統合されていて、ミャンマーの状況と際立った相違があることが分かった。

令和 4 年度中に計画していたベトナム調査は、受け入れ側の事情により令和 5 年夏まで延期になっていた。しかし結局、受け入れ側事情が改善されずに、行き先をカンボジアのチャムとムスリム・コミュニティのみに絞って 9 月中旬の２週間ほど、池田、菅原、吉本、小林の 4 人で実施した。前半はプノンペンと北部のウドム、北東部メコン川沿いのコンポンチャム、北部のオーリセー村にチャム・ムスリムの調査を行い、後半に西部の海岸地方へ。ムスリム地域でモスクと学校をまわりインタビュー調査、シアヌークビル、コンポート、シエムレアップとアンコール地域への調査を行った。チャムのみならず多様なムスリム・コミュニティの実態を知ることができた。

また、令和 5 年度末に研究代表者の池田が、バングラデシュのダッカと南東部のチッタゴン地方へと補充調査を行ない、ロヒンギャ難民キャンプとコックスバザール、チッタゴン、ダッカにおいて資料調査と関係者にインタビュー調査を行なった。

(4) 国際シンポジウムの開催：

令和 5 年 11 月３～５日に、科研 B「東南アジアのイスラーム化前期に関する研究―宗教・王権・宇宙観」(21H00575、代表者：菅原由美）との共催で、国際シンポジウム「*Islamization in Southeast Asia as reflected in literature, archival documents and oral stories.* 」を大阪大学箕面キャンパスで開催した。本科研の発表は 11 月 4 日に Bengali and Cham Muslims in Mainland Southeast Asia: Between History and Anthropology と題して、第一に東南アジア大陸部西部のロヒンギャ事例についてゾーリンアウン（ミャンマー)、池田一人、サマック・コセム(タイ・チェンマイ大学)の３氏、第二に東部のチャム事例について新江利彦(東洋大学)、吉本康子（京都大学)、中村理恵（東洋大学)、大川玲子（明治学院大学）の４氏の発表を行なった。

各氏の発表タイトルは以下の通りである。

・Zaw Lynn Aung (Independent Researcher), Presence of Muslims and Conflicts between Two Communities in the Late Mrauk U Period (1638-1784).
・Kazuto Ikeda (Osaka University), The 1942 incident in northern Rahkine.
・Samak Kosem (Chiang Mai Unviersity), Mobility Patterns and Network Strategies of Rohingya in Thailand.
・Toshihiko Shine (Toyo University), On so called the Hai nhan, Lam nhan, Chiem tuc, Ni tuc (諧人, 藍人, 占俗, 尼俗): Composition and classification of the Cham from view point of Nguyen Dynasty (阮朝) in Vietnam.
・Yasuko Yoshimoto (Kyoto Unviersity), A Consideration on the Classification of Cham: Through the case of Cham Bani in modern-day Vietnam.
・Rie Nakamura (Toyo University), The Cham with or without Champa: the ethnic identity of the Muslim Cham people and their migrations.
・Reiko Okawa (Meiji Gakuin University), The Cham Identity in Cambodia: An Analysis Based on the 2013-2016 Cambodian Survey and 2023 U.S. Interviews.

(5) 新しい研究課題：

３つの課題について、東南アジア大陸部社会とイスラームの歴史的社会的関係の全体像解明を目的として、縁辺部４事例（ベンガル・マレー・中国・チャム）と内陸部・移動事例を対象として、大陸部ムスリムの基本情報・知見を収集整備して事例データを集成し、新しい歴史的全体像のスケッチを提示することを具体的課題とした。個別・合同調査での成果と研究会での議論を通じて、各地域の前近代王権・植民地支配・国民国家の統治慣行と政治、経済社会的交換、メデ

ィア作用などの要因が各地域でのマイノリティとしてのイスラームのあり方を規定していることが各事例で明確になった。

本科研での取り組みの過程で、大陸部東南アジアの歴史におけるイスラームと民族という新しい研究課題が浮上した。当地の現在のイスラーム・マイノリティは例外なく民族として認知され、それは近代以後の現象ではなく前近代に遡る構造的な問題性をはらむことが分かった。今後はベンガル事例とチャム事例を比較対照することによって、とくに以下の 2 点について取り組むことがメンバーで確認された。

第一はベンガル事例についてである。東南アジア大陸部西辺におけるベンガル系ムスリムは、ラカイン地域のムラウ朝（1430-1784）がベンガルのイスラーム世界の東端を支配していたことにより、上座部仏教世界にマイノリティとして組み込まれた。インド洋交易に参画した 15～17 世紀のムラウ王はイスラーム称号を持ち宮廷にはムスリム詩人や廷臣もいたが、17 世紀のムガール帝位継承を巡ってラカインに亡命したシャー・シュージャ殺害事件の頃から宗教的軋轢が表面化したとされる。18 世紀末からのコンバウン朝によるムラウ朝併合の 40 年間を経て、この地は 19 世紀初頭から英国の植民地となる。仏教徒と同様、ムスリムはベンガル人、チッタゴン人として西欧流の人種・民族に分別され支配を受ける。ロヒンギャという名乗りが出現したのは 1940 年代、独立ビルマが民族を要諦とした連邦制となることが判明してこの地に民族政治が本格化したタイミングであった。今日、ロヒンギャは世界的な難民・民族問題に発展している。

第二はチャム事例についてである。大陸部東辺のチャムでは、その王国史が 2 世紀の漢籍に見える林邑から説き起こされ、４世紀にインド化し 7 世紀にチャンパー名が初めて出現するとされている。王国とはいっても各地域の地方王権群のゆるやかなマンダラ政体であり、10 世紀以降中国から独立し南下・拡大する北方のベト人勢力との角逐によって、15 世紀には政体としては縮小・衰退し藩属を余儀なくされた。一方、同じ 15 世紀にその一部がイスラームを受容し、チャム人は海域東南アジア世界に商人として渡り、あるいはカンボジアやベトナム領域に離散していったという。海域とカンボジアではおなじオーストロネシア語族に属する、イスラーム化したマレー人との深い関係性が見て取れる。19 世紀にフランス人歴史学者がチャンパー史を発見し、歴史に溶解しつつあったチャムは、固有の言語と歴史を備えた仏領植民地インドシナの一民族として内外に地位を確立して学者の関心の対象となり、当事者の民族意識を涵養した。今日、そのムスリムのあいだではチャムとチャンパーがまったく語られない集団すら存在し、チャムにおける民族とイスラームの関係は他例では見られない示唆的な特徴をもつ。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計22件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 黒田景子	４．巻 89
２．論文標題 「牛泥棒とノーラの舞-マレー半島中部の内陸社会」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『人文学科論集』	６．最初と最後の頁 11-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 王柳蘭	４．巻 71
２．論文標題 「多文化な日常における防災 ： 『いつも』と『もしも』をつなぐ ： 第99回公開講演会」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『人文研ブックレット』	６．最初と最後の頁 93-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林知	４．巻 -
２．論文標題 「紹介　石井米雄．1991.『タイ仏教入門』めこん」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中西嘉宏・片岡樹編『CSEASブッ クガイド　初学者のための東南アジア研究（電子図書）』（東南アジア地域研究研究所）	６．最初と最後の頁 80-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kobayashi Satoru	４．巻 -
２．論文標題 “Regenerating Ancietn S_m_s: A Study of Buddhist Places of Worship in rural Cambodia.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 James Carbine and Erik Davis eds. S_m_s: Foundation of Buddshit Religion. Honolulu University of Hawaii Press	６．最初と最後の頁 177-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林知	4．巻 -
2．論文標題 「アジアの仏教と日本の仏教」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 佐藤史郎・石坂晋哉編『現代アジアをつかむ』東京：明石書店	6．最初と最後の頁 391-400
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菅原由美	4．巻 54
2．論文標題 「十七世紀バタヴィアにおけるオランダ人と欧亜混血児」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『適塾』	6．最初と最後の頁 57-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山根聡	4．巻 91
2．論文標題 「2021年のパキスタンにおける対アフガニスタン外交の変化と中国の支援」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『国際情勢』	6．最初と最後の頁 155-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菅原由美	4．巻 nil
2．論文標題 コラム「ジャワにおける植民地統治の進展と社会の分裂」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 吉澤誠一郎・林佳代子編『岩波講座世界史17：近代アジアの動態19世紀』	6．最初と最後の頁 258-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅原由美	４．巻 nil
２．論文標題 「アラウディン・リアヤット・シャー・アルカハル」「イスカンダル・ムダ」「スルタン・アグン」「トルノジョヨ」「セノパティ」「ヤン・ピーテルスゾーン・クーン」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 姜尚中監修『アジア人物史7：近世の帝国の繁栄とヨーロッパ』	６．最初と最後の頁 734~753
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅原由美	４．巻 28
２．論文標題 巻頭特集「現地語写本にみる東南アジアのイスラーム化」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Field Plus	６．最初と最後の頁 nil
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅原由美	４．巻 nil
２．論文標題 「第４章　スマトラ、ジャワ、マカッサルにおけるイスラームの広まりと社会変化」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 久志本裕子・野中葉編『東南アジアのイスラームを知るための64章』	６．最初と最後の頁 55~59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅原由美	４．巻 nil
２．論文標題 「第7章　植民地期と日本軍政期（インドネシア）－イスラーム指導者の政治的立場の変化」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 久志本裕子・野中葉編『東南アジアのイスラームを知るための64章』	６．最初と最後の頁 45~49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉本康子	4．巻 28
2．論文標題 「チャムのイスラーム受容とは－バニの写本を通して考える」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Field Plus	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉本康子	4．巻 nil
2．論文標題 「母系・双系親族ーベトナム中南部のチャムとカウ」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 岩井美佐紀編　明石書店、　『現代ベトナムを知るための63章【第 3 版】』	6．最初と最後の頁 138-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉本康子	4．巻 nil
2．論文標題 「ベトナムー「ホイザオ」の現在」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『東南アジアのイスラームを知るための 64章』	6．最初と最後の頁 44-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池田一人	4．巻 51
2．論文標題 「書評：中西嘉宏著『ロヒンギャ危機―「民族浄化」の真相』（中央公論社、2021年）」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『東南アジア―歴史と文化』	6．最初と最後の頁 128-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 池田一人	４．巻 27
２．論文標題 「阪大箕面における外国学研究大学院の構築と東南アジア５専攻の取り組み―東南アジア研究・教育の現状と課題から考える―」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『エクスオリエンテ（EX ORIENTE）』	６．最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林知	４．巻 nil
２．論文標題 「雨季と乾季が明瞭に分かれるサバナ気候のカンボジアでは人々はどのように暮らしているのだろうか」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『フィールドから地球を学ぶ　地理授業のための57のエピソード』横山智・湖中真哉・由井義通・綾部真雄・森本泉・三尾裕子編。東京：古今書院	６．最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 So YAMANE	４．巻 58
２．論文標題 On the Idea of Symbiosis in the Poetry of Bulleh Shah, an 18th Century Punjabi Sufi Poet	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ORIENT Journal of the Society for Nera Eastern Studies in Japan	６．最初と最後の頁 91-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山根聡	４．巻 27
２．論文標題 地域研究から地域間研究、外国学研究へ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『エクスオリエンテ（EX ORIENTE）』	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山根聡	４．巻 93
２．論文標題 2022年パキスタンにおける政権交代と国民の分断	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国際情勢紀要	６．最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山根聡	４．巻 nil
２．論文標題 パキスタン洪水 関心高めて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京新聞、中日新聞 16-16 2022年11月4日	６．最初と最後の頁 16-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計43件（うち招待講演　17件／うち国際学会　10件）

１．発表者名 黒田景子
２．発表標題 「マレー半島中部のネットワーク：　十二支の国の世界　17-20世紀を中心に」
３．学会等名 「インド太平洋」概念の批判的考察：アンダマン・マラッカ海域における海洋秩序の分析
４．発表年 2021年

１．発表者名 王柳蘭
２．発表標題 「多文化な日常における防災―『もしも』と『いつも』をつなぐ」
３．学会等名 同志社大学人文科学研究所第９９回公開講演会
４．発表年 2021年

１．発表者名 村上忠良
２．発表標題 「タイにおけるパシュトゥン系住_のネットワーク形成」
３．学会等名 「移_・難_とコミュニティ形成」ワークショップ」
４．発表年 2021年

１．発表者名 小林知
２．発表標題 「カンボジアの仏教」
３．学会等名 公益財 団法人仏教伝道協会『連続仏教講座　世界の仏教を学ぶPart2』
４．発表年 2021年

１．発表者名 小林知
２．発表標題 「現代カンボジアにおける上座部仏教の社会的位置」
３．学会等名 龍谷大学世界仏教文化研究センター『世界仏教文化研究センター　セミナー』
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅原由美
２．発表標題 「ジャワとスマトラにおける『歴史』」
３．学会等名 科研「ペルシア歴史物語の生成、伝播、受容に関する学際的研究」（近藤信彰代表）研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅原由美
２．発表標題 「19 世紀ジャワにおける地獄物語の変容： 『髑髏物語』と『天国と地獄に関する詳細な知らせ』の比較から」
３．学会等名 東南アジア学会第103回研究大会パネル「東南アジアのイスラーム書にみる「天国と地獄」： 死生観および社会道徳観への影響」（代表菅原由美）
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅原由美
２．発表標題 「Babad Tanah Jawiにおける聖者」
３．学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容―イスラーム化過程における国家の戦略と役割」（代表菅原由美）．2021年度第3回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅原由美
２．発表標題 「思想と戦略にみるムスリム・コネクティビティ：インドネシアにおける慣習法とイスラーム法」
３．学会等名 イスラーム信頼学WS「思想と戦略にみるムスリム・コネクティビティ：ミャンマーとインドネシアの事例から」
４．発表年 2022年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 「18世紀パンジャーブにおける諸宗教の交差」
３．学会等名 RINDAS 総括シンポジウム「南アジアの思想と価値の基層的変化」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 「パキスタン社会のターリバーン政権へのまなざし：域内関係における新たなコネクティビティとイスラーム」
３．学会等名 思想と戦略にみるコネクティビティ：パキスタン、アフガニスタンとシリアの事例から（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 「ターリバーンの首都制圧とパキスタン」
３．学会等名 中東情勢研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 「南アジアの思想潮流とターリバーン」
３．学会等名 シンポジウム「現代ムスリム知識人の変容と交流」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 「9.11がもたらしたパキスタンの社会変容と南アジア域内情勢の流動化」
３．学会等名 シンポジウム「20年目の9.11を超えて：グローバル社会、イスラーム世界、ポスト・テロ時代を眺望する」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 So Yamane
２．発表標題 「ウルドゥー文学を通してみたパキスタンと日本の文化交流（ウルドゥー語）」
３．学会等名 「世界におけるウルドゥー文学」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 「アフガニスタン政権の失敗とターリバーンの再拡大」
３．学会等名 緊急ウェビナー「緊迫するアフガニスタン情勢」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 「ターリバーンの25年」
３．学会等名 「ターリバーン政権復活をめぐる利益と不利益」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 So Yamane
２．発表標題 "National Cricket Hero Wears White Hat- How Pakistani Politics Create a New Leader"
３．学会等名 International Conference: Populism, Diversity, and ‘Enemies of the People’: ‘Politics’ and Society in South Asia in the Twenty-First Century（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 So Yamane
２．発表標題 "Ijtimaa'ii Zahaanat men Urdu kaa Kirdaar（集団的知性におけるウルドゥー文学の役割）"
３．学会等名 Internatiojnal Conference on the Role of Urdu（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 池田一人
２．発表標題 「国軍クーデターとミャンマー社会の現在―何が起こっているのか」
３．学会等名 朝日カルチャーセンター講演
４．発表年 2021年

１．発表者名 池田一人
２．発表標題 「ミャンマー現代史におけるクーデター―民主化問題と民族問題の現在」
３．学会等名 朝日カルチャーセンター講演
４．発表年 2021年

１．発表者名 池田一人
２．発表標題 「ミャンマーの『民族』を歴史の中で考える―ロヒンギャ、カレン、ビルマ―」
３．学会等名 慶応義塾大学言語文化研究所2021年度公開講座（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 池田一人
２．発表標題 「1950-60年代ミャンマーの「ロヒンギャ」に関する予備的考察：ウー・ヌ政権期のイスラームをめぐるコネクティビティの形成、その解体について」
３．学会等名 イスラーム信頼学B02班「思想と戦略に見るムスリム・コネクティビティ：ミャンマーとインドネシアの事例から」ワークショップ
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yumi SUGAHARA
２．発表標題 “Changes in Theological Discussions in Java in the 16th~17th Centuries”
３．学会等名 “Interactions between Islamicate and Indic Societies in South and South-East Asia: Comparative Perspectives”, Centre Asie Du Sud-Est, Paris(online), April 7, 2022（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yumi SUGAHARA
２．発表標題 "Holy persons in the Babad Tanah Jawi”
３．学会等名 International Symposium:“Transformation of Religions Reflected in Javanese and Other Texts from Southeast Asia: the Roles and Strategies of States in the Process of Islamization” April 23, 2022.（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yumi SUGAHARA
２．発表標題 “Changes of the Tale of Hell in Nineteenth-Century Java”
３．学会等名 International Workshop “Recentering the Islamic World, Perspectives from Java”, Colombia University, New York（オンライン）, April 30, 2022.（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 菅原由美
２．発表標題 「NUとムハマディヤが目指す「穏健なイスラーム」：歴史と記憶の観点から」
３．学会等名 AA研共共課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究」AA研、東京（オンライン）、2022.7.10.
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yumi SUGAHARA
２．発表標題 "New Religion and State Strategies: Saints and Sultans in the Babad Tanah Jawi”
３．学会等名 Research Group Reunion Conference “New Directions in the Study of Javanese Literature” The Hebrew University of Jerusalem, Israel, 9 November 2022.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 菅原由美
２．発表標題 「17世紀アチェの宗教思想家の影響とその研究について」
３．学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみるイスラーム化前期」（代表菅原由美）．2022年度第3回研究会 2023年3月29日.（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yumi SUGAHARA
２．発表標題 “Perubahan Kisah Neraka di Jawa Abad ke-19”
３．学会等名 Konferensi Internasional Budaya Lokal/ International Conference of Local Wisdom (Incolwis), Universitas Sebelas Maret, Surakarta, 2022.9.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yoshimoto Yasuko
２．発表標題 ‘The Impact of Islam and the Formation of Vernacular Tradition of the Cham in Panduranga: Through a preliminary study of Patar.’
３．学会等名 International Symposium:“Transformation of Religions Reflected in Javanese and Other Texts from Southeast Asia: the Roles and Strategies of States in the Process of Islamization” April 23, 2022.
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yoshimoto Yasuko
２．発表標題 ‘Islamic Religious Practices in Vernacular Religion: Through The Case of Cham Bani in Vietnam.’
３．学会等名 “Webnar: EXPLORING THE INTERSECTIONS OF POPULAR AND ORTHODOX SPIRITUAL PRACTICES IN MAINLAND SOUTH EAST ASIA”, Hawaii Univerisity at Manoa. Novernber 2.2022
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉本康子
２．発表標題 「バニの宗教文書パタルにみるポー・クッ」、2022年度第3回『ジャワ語及び東 南アジア諸語テキストにみる「イスラーム化」前期』
３．学会等名 共同利用・共同研究課題研究会、 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所2023年3月29日
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kazuto IKEDA
２．発表標題 Comment given at Panel 3, “Socio-Political Integration and Ethnicity in Early-Modern Mainland Southeast Asia”
３．学会等名 sian Association of World Historians (AAWH) Fifth Conference in Collaboration with International Centre (IIC), New Delhi, held Online Room 5 on 13th October 2022.（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kazuto IKEDA
２．発表標題 “Becoming Rohingya in Myanmar: Ethnic Politics in the U Nu Era 1948 to 1962”
３．学会等名 he 2nd International Conference on Islamic Trust Studies “Translation and Transformation in Muslim’s Connectivity” held at Minoh Campus, Osaka University on 27th November 2022.（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 池田一人
２．発表標題 ミャンマーの『ロヒンギャ』における民族形成と民族政治－1942年から1962年の時期を中心に－」
３．学会等名 大阪大学地域研究フォーラム（OUFAS）第166回研究会（於・大阪大学箕面キャンパス、2022年12月8日）
４．発表年 2022年

１．発表者名 池田一人
２．発表標題 「３年目のミャンマー」
３．学会等名 大阪大学外国語学部『マンスリー多文化サロン』（於・大阪大学箕面キャンパス101教室＋オンライン、2023年2月16日）
４．発表年 2023年

１．発表者名 池田一人
２．発表標題 植民地期からウー・ヌ期にかけてのラカイン北部ムスリムに関する緒言的考察：『移民』、1942事件、民族政治における『ロヒンギャ』」
３．学会等名 科研「ゾミア2.0：『東南アジア』と『南アジア』の境域における開発・民族・宗教」研究会（於・津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス、2023年2月18日）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 ヒンドゥーとムスリムの対立と言語－19世紀末ラーホールの刊行物を通してみえるもの
３．学会等名 環インド洋地域研究 HINOWS文学研究会「戦争と文学」 2023年3月24日
４．発表年 2023年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 「19世紀後半のウルドゥー語資料に見る文学空間と宗教－牝牛保護運動のマスナヴィー」
３．学会等名 イスラーム穏健派研究会 2023年2月15日
４．発表年 2023年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 2022年パキスタンにおける政権交代と国民の分断
３．学会等名 中東情勢研究会 2022年11月18日（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 パキスタンの言語事情とウルドゥー文学の歴史
３．学会等名 第36回「シンポジウム・パーキスターン2022 ウルドゥー語の世界」 2022年11月12日（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山根聡
２．発表標題 ターリバーンの方針の変化にみる戦略的判断
３．学会等名 イスラーム信頼学全体集会「イスラーム信頼学って、どのように研究するの？」 2022年3月14日（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計8件

１．著者名 Keiko Kuroda	４．発行年 2021年
２．出版社 ILCAA	５．総ページ数 108
３．書名 Siamese and Thai Buddhist Temples in Kedah :A Field Report of 2007-2009	

１．著者名 山根聡、前田耕作	４．発行年 2021年
２．出版社 川手書房新社	５．総ページ数 408
３．書名 『新版 アフガニスタン史』	

１．著者名 王柳蘭・山田孝子（編）	４．発行年 2023年
２．出版社 国際書院	５．総ページ数 341
３．書名 『ミクロヒストリーから読む越境の動態』	

1．著者名 山根聡	4．発行年 2023年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 292
3．書名 『イスラームからつなぐ 1 イスラーム信頼学へのいざない 』(担当:分担執筆，範囲:第7章 信頼のためのイスラーム思想と戦略 現代南アジアにおける政治運動の正当化)	

1．著者名 山根聡	4．発行年 2023年
2．出版社 NHK放送文化研究所	5．総ページ数 320
3．書名 『NHKデータブック世界の放送2023 』 (担当:分担執筆，範囲:パキスタン)	

1．著者名 山根聡	4．発行年 2023年
2．出版社 集英社	5．総ページ数 840
3．書名 『アジア人物史10 民族解放の夢 』 (担当:分担執筆，範囲:近代アフガニスタンの群像－大国のはざまで模索する国家統一)	

1．著者名 山根聡	4．発行年 2023年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 748
3．書名 『イスラーム文化事典』(担当:共編者(共編著者)，範囲:「ラマザーン月の実践（南アジア）」「犠牲祭（南アジア）」「凧揚げ（南アジア）」「地域ごとの食文化（南アジア）」「ファストフード（パキスタン）」「地域ごとの言語と文字（南アジア）」「預言者伝、聖者伝（南アジア）」「近代文学（南アジア、パキスタン）」)	

１．著者名 山根聡	４．発行年 2022年
２．出版社 臺灣商務印書館	５．総ページ数 100
３．書名 「伊克巴勒的倫敦」（イクバールのロンドン）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小林　知 (Kobayashi Satoru) (20452287)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・教授 (14301)	
研究分担者	村上　忠良 (Muraakmi Tadayoshi) (50334016)	大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授 (14401)	
研究分担者	王　柳蘭 (Ou Ryuran) (50378824)	同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授 (34310)	
研究分担者	吉本　康子 (Yoshimoto Yasuko) (50535789)	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・特任研究員 (14301)	
研究分担者	山根　聡 (Yamane So) (80283836)	大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授 (14401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	菅原　由美 (Sugahara Yumi) (80376821)	大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授 (14401)	
研究分担者	黒田　景子 (Kuroda Keiko) (20253916)	鹿児島大学・共通教育センター・名誉教授 (17701)	削除：2023年6月14日

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大川　玲子 (Ookawa Reiko)	明治学院大学・国際学部国際学科・教授	
研究協力者	ゾー　リンアウン (Zaw Lynn Aung)		
研究協力者	石川　和雅 (Ishikawa Kazumasa)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関